

やはり一色いろははあ
ざとい。

ざきりん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

卒業した八幡。

しかし大学へ行つてもあざとい後輩に振り回される。

甘い甘い二人の物語。

第10話	第9話	第8話	第7話	第6話	第5話	第4話	第3話	第2話	第1話
									目次
64	59	52	43	35	29	21	15	7	1

第1話

「あー…。」

ようやく長い長い卒業式が終わった。

今頃クラスの中ではリア充共がお別れの涙を流していることだろう。
しかしづつちである俺はなにもすることがないので家に帰ろうとしているわけであ
る。

いや、別に悲しくなんてないからね？

むしろ家にいる小町に会いたくて心が弾んでいるまである。

「せんぱーい！」

なにやら聞き覚えのある声がするがきっと他の誰かに話しかけているのだろう。
ここで振り向いてはいけない。
ソースは俺。

いやーばつちり目あつたのに完全にスルーされるとか辛いよね。うん。とそんなことを考えていると後ろから手で目を覆い隠された。

「だーれだっ？」

俺の知り合いでこんなにあざとい声を出せるのは一人しかいない。

「一色か。」

「むー。こんなにかわいい女の子がせんぱいに声をかけてるんですよー? もつと何かないんですか?」

頬を膨らませ上目使いで話しかけてくるこの後輩は一色いろは、元生徒会長で今はサッカー部のマネージャーとして頑張っているようだ。

「はいはい。あざといあざとい。」

「ご卒業、おめでとうござります!! ビシツ (^――^) ッ

あとあざとくないですし!」

「…おう。お前も頑張れよ。」

「……はつ、もしかして口説いてるんですかちょっとドキッとしましたが卒業式の雰囲気を利用するなんてずるいのでまた別の日にしてくださいごめんなさい。」

俺は何度こいつに振られればいいのだろうか。

「……じゃあな。」

「ちょ…ちょつと待つてください！なんで帰ろうとしてるんですか!?」

「だつて早く小町に会いたいし。」

「うわ、シンコン……っていうか先輩がいないと誰も先輩の家に行けないじゃないですか～。」

「・・・は？」

「あれ、聞いてないんですか？今日先輩の家でみなさんと卒業祝いするんですよ？」

「聞いてねえし・・・しかもなんでうちなんだよ。」

「小町ちゃんからうちで卒業祝いしましょう！！ってメールがきました。」 テヘツ
小町……なんて恐ろしい子！

「はちまーーん！」 キラキラ

はつ！戸塚の声がする！ガバッ

ああ今日も戸塚は可愛いな。・・・ん？戸塚？

「まさか戸塚も卒業祝いに来るのか？」

「はい。あと雪ノ下先輩と結衣先輩もですよ。」

前言撤回。

後の二人はどうでもいいが戸塚を呼ぶなんて小町まじ天使グツジョブ！これはもう俺の家まで案内するしかないだろう。

＼＼＼＼＼比企谷宅＼＼＼＼＼

ガヤガヤ

「今日はお集まりいただきてどうもありがとうございます！今日はこんなごみいちゃんの面倒を見てくださったお礼として小町が腕によりをかけてお菓子を作つたのでもじやんじやん食べて行つてくださいー！」

ねえこれ卒業祝いだよね？なんで卒業生の俺がデイスられてんの？もうやだ泣きた
い。

「全く、二年もヒキガエルくんの相手をするのは大変だつたわ。」

「俺を力エル扱いするのやめてね？」

「ねえ八幡！またテニスやろうね！」

「お・・おう。」

戸塚マジ天使。小町と同じぐらい天使。なんなら戸塚と同棲生活を送りたいまである。

「まあまあ！ヒツキーもゆきのんも楽しもうよ！せつかく最後にこうやつてみんなで集まれてるんだしさ！」

「ですです！あ！先輩このケーキどうですか？はい、あーん。」

「自分で食えるからやめてくれ。」

「先輩照れてるんですか？」「ニヤニヤ

「うつ・・うるせ。」//

結論を言うと楽しかった。ちよくちよく邪魔が入つたりしたが戸塚といっぱい話せたし。これ以上ない卒業祝いだつたな…。

「じゃあ僕はそろそろ帰るね！」

「私もそろそろ失礼するわ。」

「ゆきのん帰るのー？じゃあ私もー！」

「みなさん帰るんですかー？でわでわ私も失礼します！」

「ああ……戸塚帰っちゃうのか……。」

全員外に出て帰ろうとしたその時耳元で

「先輩明日暇ですか？デートしに行きましょう！10時に千葉駅で！お願ひしまーす」ボソツ

「え、あ、；」

断る暇もなく強制的に決まってしまった。

「はあ……。」

第2話

「…はつ…はつ…」

どうして休日の午前中から走っているのか。次の電車に何としてもならなければいけないからだ。なぜその電車に乗らなければいけないのか。集合時間に間に合わないからだ。一色いろはとの。

駅について改札を通り階段を全力で駆け上がっていると無情にも電車のドアが閉まる音が聞こえた。

「はあつ…はつ…はつ…。……メールしとくか。」

「遅いなあ・・・。」

いつもなら時間前か、遅くとも時間通りには来るのに今日はもうすでに5分すぎている。デートが楽しみすぎて集合時間よりも30分も早く来てしまったこともあって余計に待ち時間が長く感じる。

うざいって見捨てられちやつたかな・・・。

でももう先輩と学校で会えないと思つたら寂しすぎて、昨日いつの間にか無意識にデートに誘つてしまつていた。

気づくと目にはうつすら涙が溜まつている

「もつといろんなどしたかつたな・・・。」グスツ・・

「・・・何をブツブツ言つてるんだ？」

「ひやつ!!」

「そ・・・そんなに驚かないでくれ・・・。トラウマになっちゃうだろ。。。」

「せ・・・先輩遅いです！待ち合わせ時間に遅れるなんてさいてーです！！・・・・・・・もう来ないかと思つちやいました・・・。」ボソッ

「いや、悪い。でもメールしただろ？」

「・・・へ？」

携帯の画面を見て見ると

20XX/3/15 9:57

from 先輩

Re:件名なし

遅れる。

本當だ。

気づかなかつた…。

それにしてももつと書くことなかつたんですかね…。

まあ先輩らしいですけど。

「でもでも！私超待ちました！罰としてまたデートしてくださいね！」

「またするのか…ってかそこは全然待つてないって言わないとダメなんじやなかつたのかよ。」

「いつものお返しです!!!」 プイツ

まあまたデートの約束ができたので許してあげます！

……やっぱり私先輩のこと好きなんだなあ。

わかっていることだけどつい考えてしまう。だつていつも猫背だし、顔も全然タイプじゃないし、目は腐ってるし、でもその中にある下心のない純粋な優しさが好き。決してきれいなものじゃないけれど

私はそれに憧れているんだと思う。先輩のいう『本物』に。
とりあえず今日は先輩との、デートを楽しもう!!

「ほらー！行きますよ先輩？」

そうして私は先輩の手を取つて歩き出した。

：一色は一体どうしたんだろう。

集合場所に来てみたら一人で何やらブツブツ呟いていたので声をかけると、一瞬、ほんの一瞬ではあるが今まで見たことがないほど悲しそうな顔をしていた。まあ本当に

一瞬だつたので見間違이じやないかと言われらの否定はできないのだが。

「…まあいいか。」

今は楽しそうに俺の手を引っ張つてゐる。

ん？一色が俺の手を…？

「つ／＼」

急に恥ずかしさが襲つて來たので慌てて手を離す。

「なんで離すんですかー？デートなんですから手繋ぎましょう！あ、ちなみに拒否権はありませんよ？」

結局強引に手を握られる。

「つていうかどこに向かつてるんだ？」

「そんなの決まつてるじゃないですか～？」
いや、全くわかんないんだけど。

一色の足が止まつたのは卓球台の前だつた。

「この前のリベンジです！あ、私が勝つたらもちろんお昼は先輩のおごりですよ？」

「…手加減なんてしないからな？」

「…ふう。」

「なんとか勝てた。危なかつたー。」

「むむむ……しょ・しょうがないですね。今回は私の負けってことにしてあげます。」ム

スツ

「いや、完全に負けだから。あと今回『は』じゃなくて今回『も』な?」
「次は負けません!」

なんだかんだで1時間以上たっている。そろそろ腹も減ってきた。

「せんぱーい、お昼どうしますか?」

「今日はお前が決めてくれー。」

「そうですねえ……あつ！じやああそこ行きましょう。」

『カツプル限定！ラブラブランチセット』あります??

そんな張り紙がしてある。

嫌な予感が…。

「先輩！ここで食べましょう！」

的中した。。

店に入ると中では多くのカツプルがイチャイチャしている。
俺一人では絶対に入らない場所だ。

「ご注文はお決まりですか？」

「この『カツプル限定！ラブラブランチセット??』お願ひします！」ニコツ
「え、いや、俺らカツプルじやな……いたつ！」

足を踏まれて一色の方を見るとこつちを向いて睨んでいる。
怖い！なんで口は笑つてゐるのに目はあんない冷たいの？！

いろはすこつわ！

「それではラブラブランチセットでよろしいですね？」
「はい！」ニコツ

第3話

俺と一色の間にはなんとも言えない沈黙が流れていた。

……なんだこれは。

いや待て、一回状況を整理してみよう。

まず俺は一色に連れられてとてもオサレなカフェに入った。

そしてそこで『ラブラブランチセット??』なるものを頼まれてしまつた。

よし、そこまではオーケーだ。いや、まあカツブル限定って書いてあるからほんとは頼んじやいけないんだろうが。問題はそのあとだ。

「ドリンクでござります。」

そう言つて店員は大きなグラス?を1つ持つてきた。当然もう1つ持ち運ばれてく

るだろうと待っていた俺はそこに気づいた。

そう、ストローの形状が変なのだ。

何やら複雑な軌道を描いてストローの口（くち）が2つに分かれている。よく見ると、ラブラブセット限定ストローと書いてある。

：嘘だろ……？

「いつ……一色……。」

一色を見るともじもじとしながらうつむいている。

そんなに嫌なら頼まなきやいいのに・・・。

「すいませーん。あ、コップもうひとつもらつていいですか？」

店員は驚いたのか少し目を見開いたがすぐに営業スマイルを取り戻して新たなコップを持つてきてくれた。

俺はグラスの中の飲み物を半分ほどコップに移し、コップの方を一色に渡した。

「…ほれ。」

「あ…ありがとうございます…。」

は……恥ずかしい――――――――

まさかこんなことになるなんて……。

さすがに口が分かれてるとはいえ同じストローで一緒にドリンクを飲むのはハードル高すぎるよ――――――

つていうかこんな時でもさりげなく持ちにくく大きなグラスじゃなく持ちやすい小さめなコップを私に渡す先輩あざとすぎです。

先輩を見てみるともう何事もなかつたかのようドリンクを飲んでいる。

もうちよつと意識してくれてもいいのに。
先輩だから仕方ないけど。

少し冷静を取り戻した私はいつものようにあざとく

「今度は『同じ』グラスで、『同じ』ストローで飲みましょうね?」

と攻撃してみる。

「つ――・飲まねえよ。」

よし！少しは動搖してくれるみたい♪
?????) ♪

それから先も何かが運ばれてくることにいろいろあつた。

途中から一色も慣れたのか積極的にやろうとするし、練習だというのにやりすぎだろ
う。

中学生の頃の俺だったら「あれ？これいけるんじやね？」とか勘違いして告白して振
られて夜に枕を涙で濡らしていたことだろう。

カフェを出てからは特に何をするでもなくプラプラと歩いて過ごした。いやほんと
なんで女子というものは何も買わないのになんでいろいろなものを見て回るのだろう
か。

そんな思いが顔に出てしまっていたのか一色には「いろは的にポイント低いですよ
？」と言われてしまった。

そのうち由比ヶ浜や陽乃さんあたりも使い出しそうだな……。
それは八幡的にポイント低い。

日も暮れてきたので今日はもう解散ということになつた。さすがに3月にもなると
日が落ちるまでが長い。

「では先輩！ またデート行きましょうね！ 予定空けといてくださいよ？ まあ先輩なん
で、そこに関してだけは信頼できるんですけど。」

「やつぱり次もあるのか……。あと俺がいつも暇みたいにいうのやめてね？ ちゃんと予
定あるから。日曜とか朝7時半からレンジャーとか仮面ライダーとかプリキュアで超
忙しいから。」

「うわあ……さすがにそれはドン引きです。近づかないでください。」

「酷すぎる……そんなこと葉山には言うなよ？」

「心配されなくとも葉山先輩にはこんなこと言いませんよー。葉山先輩、プリキュアと
か絶対見ないでしようし。」

「さいですか：じゃあな。」

「はい！ 帰り道にぼーっとして怪我とかしないでくださいよー？」

「しねーよ…。」

家に帰った俺は小町の作ってくれた晩御飯を食べた後、ベッドで寝転がっていた。メールの着信音が聞こえたが、今日一日ずっと外出していたこともあって睡魔が襲つてきたので見ずにそのまま寝てしまった……。

第4話

「ふあ～・・・。」

休日というものはなぜあるのか。平日に体がクタクタになるまで働いた体を休ませるためである。昨日は一色のせいで休日にもかかわらず働いてしまった。不覚・・・。
・・・二度寝するか。

バンツ！

「お兄ちやーん！」

「・・・小町、人の部屋に入るときはノックを・・・」

「お兄ちゃんの部屋に入るのにそんなの必要ないでしょー？」

いや、むしろお兄ちゃんだからこそ必要なんだが……。

「で、お兄ちゃん！ 醤油切れたから買ってきてくんない？」

「え……。」

「え……。なんて言わないの！ そんなこと言つてるからごみいちゃんなんだよ？」

「どういうことだよ……。分かつた、お兄ちゃんに任せろ。」

「ありがとー！ やっぱりお兄ちゃんは世界一のお兄なんだよ!! あ、今の小町的にポイント高い！」

「最後のがなかつたらな……。」

バタンツ！

まるで嵐のようなやつだ。

「・・寒い・・・。」

もう二月中旬だというのにまだまだ寒い。手袋、マフラーは必須だ。

スーパーで醤油をカゴに入れてから俺は小町に渡されたメモを見る。

「小町め・・・。」

～～～～～出発時～～～～～

「お兄ちゃん！これ！」

「ん？えーっと・・たまねぎ、にんじん、・・・。」

「お願ひしまーす！」< (?) ビシツ

「醤油だけじやなかつたのかよ・・・。」

「醤油が切れたから買つてきてとは言つたけど醤油だけなんて言つてないもーん。」

「さいですか。」

などということがあつたのだ。一体どこでそんな屁理屈を覚えてくるのか。多分家の中だな。



「あれ？ ヒツキーじゃん、何してんの？」

「…………」

「何で無視するし！」

「ん？ ああ、俺のことだつたのか。悪い、別の人を探してるとと思つてな。」

「ヒツキーって言つたらヒツキーしかいないし！ っていうかあたしのメールも無視する
し！ 酷くない？」

「メール……？ ああ、そういうや 昨日寝る前にスマホがなつてた気がするな。で、何の用
だ？」

「どつか遊びに行こーよ！」

「やだ。」

「断るのはや!?・・・・・・・・ハニトー・・・。」ムスツ

「・・・つ！ああ、そういうやまだだつたな。じやあまたいつか行こう。じやあな。」

「帰っちゃうんだ!?ちよつ・・ちよつと待つてよ！ヒツキー今日暇？」

「録画したテレビ見たり寝たり忙しいな。」

「めちゃくちゃ暇じやん！じやあ今から行こうよ！」

「い・・・いや、俺今小町からおつかい頼まれてて・・・。」

「小町ちゃんにはあたしから帰るの遅れるつて伝えとくから！・・ダメ？」

そんな上目遣いで俺を見ないでくれ。断れないだろ・・・。

「わかつたよ・・・。ほら、行くぞ。」

「うん！」

「ハニトーおいしいね！」

「ああ、結構いけるな。」

「また来ようね？」

「断る。」

「即答だ!?」
「シユン

「・・・分かつた、またいつかな。」

「・・・！うん！」 パアア

「・・・ほら、冷めるぞ。」

やはり由比ヶ浜といると調子が狂う。でもこいつとの関係は・・・「偽物」ではない、「本物」なんだと感じる。

「今日はありがとう！あたしのわがままに付き合ってくれて。」

「・・まあお前がわがままなのはいつものことだしな。むしろそれがお前だ。」

「なんか全然嬉しくない・・・・・・じゃあね！大学でもがんばろ！」

「おう。お互いにな。」

第5話

春という季節は嫌いじゃない。

桜が辺り一面に咲いていて、爽やかな風が吹き、上を見上げると青空が広がっていて、自分という存在がいかにちっぽけであるかを感じ、自分の考えていることが全てどうでもよく思えてくるからだ。

俺が何をしても、何もしなくても、この世界はいつも通り回っているということを実感できる。そのことが俺に何とも言えない安堵感のようなものを与えてくれるのである。

長々と語つたがつまり何が言いたいかというと、やっぱ長年培われたぼっちの能力は大学でも遺憾無く發揮されるんだなということだ。

春を迎える、ようやく長かった高校生活を終えて大学生になつた俺は、今までとほとんど変わらない生活を過ごしていった。変わったのは高校時代いつも聞こえていた「つべー」とか「まじないわー」とかいつたあの耳障りな声がなくなつたぐらいか。

自分で言うのも何だが、そそここ頭のいい大学に入つたのでみんな真面目で堅いやつばかりだろうと思つていたが、できるやつにもチャラい奴はいるらしい。今も教室、い

や、講義室の中心で茶色や赤色に染めた髪をバシッと整えた、いかにもなチャラ男たちと派手な格好の女子たちがワイワイはしゃいでいる。

今日の講義はもう全て終わつたので、俺はそそくさと教材を片付け、帰ろうとすると、外にサークルや部活動の勧誘を行なつている生徒たちの姿が見えた。

面倒だな…。だがしかしこんな時に長年鍛え上げたこのスキルが役に立つのだ！秘技「ステルスヒッキー」!!!

あつちこつちから「テニスサークルでーす！全員仲良く活動してまーす！」「アニメ、漫画好きのひとー、僕たちと語り合いませんかー！」

などといった勧誘の声が聞こえるが誰も俺には話しかけてこない。

やはり誰にもこのステルスヒッキーは敗られん、ふはははは！などと心の中で高笑いしていると急に耳元から声がした。

「…あの…、もしよかつたら文学研究部に入りませんか…？」

……まさかこの俺のステルス（以下略）を看破する者がいるとは…。
だがしかし声をかけられてしまつたものは仕方がない。

「文学研究部…？」

「はい…、自分で小説とか、詩やエッセイなどを書く部活です…。ぶ、部室に案内するのでついてきてください…。」

だが断る、と高校までの俺なら言つていただろうが、俺は促されるままにその文学研究部員についていく。純粹に文学研究部が実際に活動している様子が気になつたし、将来小説家になるのもありだと思つているからだ。

いやもちろん第一志望は専業主夫だが、そこは譲らない。ただ現実的に考えた結果、他の道も検討しておく必要がある。

しかも小説家だつたら家から出なくていいじゃん？自分の好きな時に小説書いて締切破つて編集者を困らせればいいじゃん？

ごめんなさい調子乗りました。小説家の皆さんごめんなさい。

部員の後から文学研究部の部室に入ると十数人の学生が活動をしていた。

そのうち人の良さそうな男子部員と見るからか元気いっぱいな感じ溢れる顔立ちの整つた女子部員がこちらに歩いてくる。いや、女子部員にはものすごい勢いでハグされた。どこのアメリカンだ。

「おつかれ奈々（なな）ー！しつかり男子捕まえて来てくれてんじやーん！」

「落ち着け桃花（どうか）。彼が嫌そうな顔してゐるぞ。」

「なにー？こんなにきれいな先輩に抱きつかれて嫌な顔するなんていつたい後輩はどんな環境で育つて来たらそつたるんだ！」

「その性格がなかつたらなあ…。」

奈々と呼ばれた俺を連れてきた部員は

「だつて彼ぐらいしか私が話かけられそうな人いなくて…。」

彼女は非常に奥手な性格らしく、なかなか話しかけられそうな人がおらず困つていたところちようど俺（のような大人しそうな人）を見つけたらしい。

彼女たちの会話に入れず、どうしようなどと思つているとアメリカンな先輩部員が話しかけてくれた。

「やーごめんごめんテンション上がつちゃつて！私は斎藤桃花（さいとう どうか）！そんでこつちがきつしーと奈々！よろしくー！」

「岸田健二（きしだ けんじ）だ。よろしく。」

「し：椎名奈々（しいな なな）です…。」

「や、まだ部活入るとか決めてなくて、ちょっと気になつただけなんで…。」

「それでも構わないよ、気がすむまで見学していくってくれ。」

なんだか葉山に通ずる何かを持つてゐる気がする…。この爽やかな感じ、整つた容

姿、岸田先輩には気をつけよう。

結局その日は文学研究部の活動を30分ほど見て帰った。

設備も整つてたし、何よりみんなでワイワイするのではなく個人個人で活動をする感じが気に入ったので、俺は入部を決意した。

斎藤先輩を始め、椎名先輩、岸田先輩、その他の部員も歓迎してくれた。拍手をされた時は少し恥ずかしかったが…。

まあそんなこんなでアパートに帰つてくると、ちょうど家から俺宛の荷物が宅配便で届けられていた。

ハンコを押して荷物を受け取り中身を見てみると、たくさんの果物が入つていた。あと小町からのメモも。

お兄ちゃんへ

小町からのプレゼントも受け取つてね！

と書いてあるが箱の中には果物しか入つていない。とくに気にせず果物をキツチンへ運び、一息つこうとしているとインターホンが鳴つた。

はい、といつてドアを開けると

「こんにちは～せーんぱいっ！遊びに来ちゃいました！」

「……一色？」

久しぶりに見た彼女は、やはりあざとく、小悪魔のように俺に笑いかけていた。

第6話

「ほんと信じられません！こんなに可愛い後輩が家に訪ねて来たつていうのに、なんドア閉めるんですか！」

「いや、あれだ、そのー、不審者だと思つたんだよ…。」

「思いつきり『…一色？』って声に出てましたけどそーですか私不審者ですかー。」

「…いや、その…悪い…。」

だつて急に来ると思わないじゃん？

そんで、ちょうど俺から見たアングルが某アニメの「嘘だ！」ってシーンに似てたんだよ…。あのアニメ超怖いよねー。え？ 知りませんかそうですか。

「てかどうやつて俺の家知つたんだよ…。」

「あ、小町ちゃんに教えてもらつたんですよ！ いやー小町ちゃんめちゃくちゃかわいいですねー！」

「当然だ。俺の妹だからな。」

「本当に先輩に似なくてよかつたですね…。」
え、それはひどくない？

いやまあ事実すぎてなんもいえないけど。むしろ小町が俺みたいな目だつたら俺は生きる意味を失うまである。

「てゆーかー、わたし超傷つきました！罰としてまたデートしてくださいね？」
「分かった…。でも人が多いところはなしで頼む。あとできれば日に当たるところもな
しがいいな。」

「罰なんで先輩は口出しできませんよ？」

うわー、すごくいい笑顔！なのになんで声はこんなに低いんだろう！
たぶんこいつ俺をいじめる時が一番キラキラしてるよな…。
こんなぼっちをいじめてなにが楽しいんだ！

「…てかお前何しに来たんだ？」

「何をしに…つて、先輩に会いに来たんですよ？」

「う……。」

さつきの刺々しく低い声から一転、今度は柔らかく甘い声を出してくる。上目遣いと

いうオプション付きで。

なにそれ反則だろ…。

中学の頃の俺ならこの子俺のこと好きなの？とか勘違いしてアタックして夜に枕を濡らしていたことだろう。

てかこの前も同じこと考えた気が…。

いやほんと…いつと中学の時に会わなくてよかつた…。

「…あーはいはあざといわー。」

「あざとくないですよう！まあほんとのこと言うと夜ご飯作りに来たんです！」

「…夜ご飯??」

「はい！先輩料理得意じやなさそうですし、それに栄養あるもの食べないと風邪引いちやいますよ！」

確かにそれはありがたい。

専業主夫志望として料理は必須スキルだ。だからちゃんと知識はある。だが残念ながら技量が知識に追いついておらず、ゆえに俺の夜ご飯はいつもオムライス、チャーハンなどのご飯もの一品で済ませている。

「あー…その…なんだ…、悪いな、なんか手伝えることがあるか？」

「わたしだけで作らないと先輩のためにならないじゃないですかー！なので先に先輩はお風呂にでも入っちゃってください。」

「そうか…。じゃあそうさせてもらうわ。」

ふと携帯を見ると小町からメールが来て いた。

宛先：比企谷八幡

件名：プレゼント！

おにいちゃん！ 私からのプレゼントは受け取った??

今頃ご飯作ってくれてるのかな？

それじゃあ楽しんでね！

小町

プレゼント？ ああそういうふうなメモがあつたような……
ん？

……一色のことかああああああああああああ!!!
いかんつい悟○口調になつてしまつた。

なるほど一色は小町からのプレゼントだつたか。

あれ？ そう思うとなんか余計に嬉しい。不思議！

まあ一色はせつせとご飯作ってくれてるし、風呂はいつてくるか……。

風呂から上がるところらしく、テーブルに色々並んでいた。

味噌汁、肉じゃが、焼き魚……

普段の一色からは想像できないほど家庭的な料理だ。

「あ、先輩！ご飯できたらんで食べましょー！」

「おう、悪いな。」

「……こういう時は『悪いな』って言われるより『ありがとう』って言われた方が嬉しいんですよ？」

「……ありがとな。」

「はいっ！」

手を合わせてそれぞれの料理を口に運ぶ。

……うまい。専業主夫を目指すものとして見習わねば。

「どうですか？」

「…や、バレンタインのイベントの時で料理ができるってのは知つてたんだが…。こ…までだとは思わなかつたわ。…毎日こんなのが作れたらいいんだがなあ…。」

「そうですかそうですか！……はつ！もしかして俺じや作れないから毎日家に来て作つてくれつて口説いてますか毎日先輩の家に来たいのは山々ですけど流石に週一が限度なんで毎日は無理ですごめんなさい。」

「いや違えよ…。」

また振られてしまつた。

振られすぎてそろそろ振られるのが気持ちよく…なりませんねごめんなさい。

「ま、なんだ…、ありがとな。」

「はいっ！」

……この笑顔は反則だろ。

普段のあざとく、計算された笑顔ではなく、本当に心からの笑顔を見せる一色に俺はどこか愛しさを感じた。

「じゃあ先輩、毎日じゃなくともいいんでたまにはちゃんとおかげも作つて健康的な食事をしてくださいね？まあ先輩が病気とかになつたら看病しに来れるんでわたし的にはプラスですけど！」

「心配してくれてるのかしてねーのかどつちだよ…。」

「でもやっぱり先輩が元気なのが一番なのでまたわたしも作りに来ますね！あ、今のい
ろは的にポイントたかーい！」

「いつからお前もポイント制導入したんだよ…。」

「じゃあそろそろ電車來るので！また来ますね！」

「また来るのか…。あー…まあ、今日はありがとな。」

「はい！」

まああいつの料理はうまかつたし、たまにならこういうのもいいか…。

あくまでたまになら、の話だが。

一色は改札を通つてもまだ俺に手を振つている。

やめて！恥ずかしくて死んじやいそう！

てかもう電車の音聞こえてるから！早く行つていろはす！

一色もそれに気づいたのか慌てて階段を降りて行く。

一色がいなくなると急に静かになつたような気がした。

やはり俺もどこかで楽しさを感じていたのだろう。

充実感を感じた後の虚無感は、なんとも言えないモヤモヤとした霧のように、俺の心

に残つた。

「さて、帰るか…。」

俺が家に帰ろうとしたまさにその瞬間、もう二度と関わることのないと思つていた人物の声が聞こえた。

その声はやはり変わらずあつけらかんとしていて、それが俺のもう忘れていた、いや、忘れようとしていた『思い出』^{ト ラウマ}を呼び起こす。

「あれっ？ 比企谷じやん、ちょー久しぶり！」

第7話

「いやー、まさか比企谷と同じ大学だつたとか、ウケる！」

「いやウケねえよ…。」

どうしてこうなつた……。

一色を見送り、さあ帰ろうとするときの声が俺を呼び止めた。

「あれっ？ 比企谷じやん、ちょー久しぶり！」

まだ大学生活が始まつてそんなに経つていないので俺にはこつちの知り合いは文学研究部の3人ぐらいしかいない。

そして彼らは俺を「比企谷」などと呼ぶことはない。

つまりこの場所で俺を呼ぶ人などいるはずがない。ということはこれは俺を呼んでいるのではなくきっと別の比企谷さんを呼んでいるのだろう。と結論づけて、そのまま歩き続ける。

どこにいるかわかんないけど早く返事してあげて、俺じゃない比企谷さん！

「ねえ、比企谷——なんで無視すんのー？ちょーウケるんだけど。」

そうそう、無視はよくないぞ比企谷さん。

いやちょっとまで……ウケる……？

そういうえば俺の昔の知り合いに『ウケる』が口癖のやつがいたような…。
と考えていると急に誰かに両肩を掴まれた。

「つーがまえたつ！」

「つ……お…折本か…。」

びっくりしたー、いや急に捕まえないで？

危うく変な声出るところだつたわ。

「なんで比企谷返事しないのー？人違いかと思つて焦つたんですけどー？」

え、そんな半信半疑の状態で俺を捕まえたの？

もし本当に違つたらどうするつもりだつたんだろうか…。

「いや、俺じやないと思つたんだよ…。」

「うちが比企谷つて呼んだら比企谷しかいないに決まつてんじやん！」

呼んだのが折本だと気づかなかつたつてことなんだが…。

あともし新しく比企谷さんが出できたら俺のことなんて呼ぶの？

八幡？うわー、それはウケないんですけどー。

「まあそんなことどうでもいいや、それよりなんでこんなとこに比企谷いんのー？」

「どうでもいいのかよ…。」

「いや、それはお前もだろ…。」

「うち？あー、うちはこの近くの大学通うために一人暮らししててさー、家が近いんだよねー。」

え…なんか嫌な予感しかしないんだけど…。」

まあ漫画やアニメ、ラノベじゃないんだからそんなことはないはず…だよな？」

あ、やばい今フラグ立てた気がする。

フラグ立てるとかないわあー、それナニタニくんー？

やめろ戸部。出てくるな。

危うくヒキタニくんつしょーって答えそうになつただろ。

あれ？でもそういう俺ヒキガヤだよな。

つてことは大丈夫じやね？

今だけは戸部が俺の名前間違えてたことに感謝だな。

「で？比企谷は？」

「ああ…、俺も似たようなもんだ。」

「え、この近くってことは…もしかして○△大学？」

「…そうちだが…?」

「まじで!?!うちもうちも!」

…フラグ立てわずか数秒で折つちやつたわ。

俺つてもしかしてフラグ建築士の才能あるんじやないかと真剣に考えちやうレベル。
折つちやうんだけどね。

「いやー、まさか比企谷と同じ大学だつたとか、ウケる!」

「ウケねえよ…。」

というわけだ。

まあ知り合いが1人もいないとは考えてなかつたがまさかその知り合いが折本か…。

こう言つちやなんだが俺の通つてる大学はぶつちやけ頭がいい。

雨取隊員のトリオン量を東大レベルとすると出水隊員の一歩手前のレベルぐらい。
え? 分かりにくいくつて?

じやあかなりまあまあなレベルだと思つてくれ。

だめだまだこのアニメのワールドから抜け出せてなかつた。

まあともかく、折本が頭いいのは予想外だ。

あの会議の時なんて『それある！』しか言つてなかつたのに…。
なんでこの頭でそのポキヤブリリーなんだよ…。

とかなんとか考えながら話しているうちに俺の住んでるアパートに着いた。
「…じゃあ俺ここだか 「あ！うちこのアパートだからー！」 ら…？」

：じゃあ俺「こ」だか「あ！うちこのアバ」、さつき立てたフラグは一本だったのか…。

59

え、比企谷もここなの？ウケる！」
「ほんとにウケねえよ…。」

部屋に入つてベットに寝転ぶと疲労感が襲つて来る。

部活を見に行つたり一色が来たり折本と会つたり今日は色々あつたからな…。まあ主に最後の折本が原因ではあるが。

そういうえば折本の部屋は俺の隣……なんてことはなく下の部屋だつた。本当に隣じやなくてよかつた。

まあそれでも下なんだが。

これまで一度も会わなかつたのは俺と折本でとつてゐる授業が違うのと、俺がほとんど外出しなかつたからだろう。

だからこれからもそんなに顔を合わせることはないだろうし、向こうも積極的に俺に関わつて来ることはないはずだ。

などと考えていたら睡魔が襲つて来る。

俺はそれに抗うことなく眠りについた。

それから一週間ほど、俺は折本に会うこともなく、特になにもない日々を過ごした。
何かあつたといえれば部活に何日か顔を出して、本を読んだことくらいか。

昨日は部活に行つていなかつたので今日は行くことにする。

まあ活動といつても大体本を読むだけなのだが。

「あ、比企谷——どこ行くの？」

「…ああ、折本か。部活に行くんだよ。」

急に話しかけられたのでちよつとびっくりしたがなんとか噛まないで話せた。

危ない危ない、ここで噛んだりしたら黒歴史がまた一つ増えるところだつたわ。
「へえー、比企谷が部活とかウケる！まさかまた人助けする部活とか？」

「そんな部活がそうあるわけないだろ…。文学研究部だよ。」

「なんか面白そう！うちもついて行つていい？」

「…まあいいんじゃねーの。」

「あ、比企谷くん、今日は来たんだー！つておやおやー？後ろの可愛い子は比企谷くんの彼女か？彼女なのか？」

「違いますよ…。なんか文研部に興味を持つたらしくて勝手について来ただけです…。」

斎藤先輩は今日も元気だ…。

あれだな、由比ヶ浜の明るさに雪ノ下姉のいじりを混ぜた感じだな。

まああの人みたいに含んだいじりではなく素だから特に嫌だとは思わないが。

「どーもー！折本かおりつて言います、文研部？つてどんな部活なんですかー？」

すると斎藤先輩が椎名先輩が俺に説明したようにかつ椎名先輩よりはきはきと答える。

にしてもコミュ力高いな…。

初対面の先輩になんでそんな気軽に話しかけられるのか。

まあ特に俺には関係ないので一冊気になつた本を手に取つて読み始める。

いい時間になつたので帰ろうとすると折本が気づいて荷物を持つて近寄つて来る。

「比企谷帰るの？じゃあうちも帰ろー。」

「いや、別に俺と一緒に帰る必要ないだろ‥。」

「ぶつちやけ一緒になんて帰りたくない。」

頼む、心変わりしてくれ。

「だつてアパート一緒にやん？そりや一緒に帰るでしょ、ウケる。」

ダメかー。

あ、このリアクションあの意識高い系の時以来だな。

声高くてしんどいからやらせないでほしい。

帰り道に話しているのを聞くと折本は文研部に入ることにしたようだ。

なぜかと理由を尋ねたら『比企谷がいるから』だそうだ。

なんでだ？俺をいじるのがそんなに楽しいのか？

やめて、俺のメンタルが持ちそうにない‥。

それに折本の頭で大丈夫なのだろうかという不安もある。

なんていつたつてあの語彙力だからな‥。

それある！の使い回しになりそうだ。

そんなことよりも問題はこれから部活から帰るときは折本もいるつてことなんだよ

なあ…。

一人の方が何かと楽だし静かな方が好きなんだが…。

まあでも折本も中学、高校とはまた違った雰囲気になつた気がする。

どこが、と言われると答えられないが何か俺に対して配慮しているような感じがある。

まああくまで感じがする程度なので氣のせいだと言われたら否定はできないが。

そのこともあって今日の帰り道はそれほど苦痛ではなかつた。

一人の方が楽だが。そこは譲れない。

「これから大変そうだな…。」

無意識に口から出た言葉に共感しながら、また少し楽しそうだと思つてゐる自分がいることに気づき苦笑したが、すぐにこれらの話よりも先に今日の晩御飯だと思つて直し、一色の世話をならないよう、買っておいた食材を使って晩御飯の調理を開始した。

第8話

「ほら先輩！ご飯食べますよー。」

「おお、ちょっと待つてろ。」

俺は身につけていたエプロンを脱ぎ、椅子に座る。

「いただきます！」

そう言つて俺と一色は作つたご飯を口に運ぶ。

一色は毎週末俺の家に来ては夜ご飯を作ってくれている。

最近では俺も平日にご飯を作るようにしているから、一色に任せることではなく俺も手伝い、2人で作ることが増えた。

まあ一色がほとんど一人でやつてしまふので俺はキッチンで棒立ち、なんてこともしばしばあるが。

珍しく、と言つてはあれだが俺が作った味噌汁を啜つているとおもむろに一色が口を開いた。

「そういえばわたしを不審者と間違えた時の罰のことですけどー、今度の週末空いてるのでその日にしましょー！」

いやなんで俺の予定聞かないの？俺だつて予定とかあるよ？

まず朝はゴロゴロするだろ、それで昼にゴロゴロして、最後に夜にゴロゴロするんだよ……予定なかつたですね、はい。

「先輩に週末予定入つてるとかありえないんで予定入つてるとかの言い訳はなしですよ？」

「いや俺だつて週末に予定入ることくらいあるからな……？」

最近は部活にも入つてるしな。

やばい週末に予定とか俺リア充デビューしちゃつたの？

え？部活で週末に予定なんてどんな陰キヤでも部活に入つていればできるつて？

……勘のいいガキは嫌いだよ。

「まあ百歩譲つて先輩が週末に予定入ることがあつたとしても、今週末はゴロゴロするしか予定が無いようなので決定ですね！」

あれ、俺そんなに顔に出てた？

ゴロゴロする顔つてどんな顔だよ……。

「さあ先輩行きますよー！」

やつて来ましたデートの定番遊園地！

強制されたとはいえまさかこんなリアリアしたところに女子と来るとは夢にも思わなかつたぜ。

まあ一緒に来ている女子が一色だからなあ…。
デートつて感じじやなく…なんというか…わがままな妹に付き合わされてる感がすごい。

小町も時々「お兄ちゃん！デート行くよ！」って誘つてくるけど基本ただの買い物だし…。小町とデート！なんて舞い上がった俺の心を返して！

と冗談はここまでにして、今非常にまずい事態に陥つていて。

遊園地に入園してから言われるがままに一色のうしろについて行つているのだが非常にまずい。由々しき事態である。

何がそんなにまずいって一色の進んでる方向だ。

目の前には遊園地のド定番ジエットコースターがそびえ立つていてのだが一色は完全に向かつて足を進めている。

自慢では無いが俺はジエットコースターが好きでは無い。いやむしろ嫌いすぎて一周回つて好きまである。一周回つちやつたよ…。

そんな俺が一色と一緒にジエットコースターなんかに乗つてしまふとこれから生涯

一色にいじられ続ける未来しか見えない。それだけは何としても阻止しなければ。
さあ、作戦開始だ！

「お…おい、一色。今どこに向かつてるんだ？」

「目の前に見えるじゃないですかー、ジエットコースターに乗りに行くんですよー！」

よしここまでは想定内…。ここからが本番だ…！

「い…いや、ジエットコースターはやめたほうがいいんじゃないか？ほ…ほら、葉山もジエットコースター苦手って言つてたし、葉山の代わりの俺が乗る必要もないだろ？」
どうだこの完璧な作戦。

強く否定するのではなくやんわりとオブラーートに包んだ否定。

そして疑問形にすることで最終決定権はあるにないと主張。

きわめつけは葉山だ。葉山がジエットコースター苦手なら一色もわざわざ葉山とのリハーサルである俺とのデート（仮）で乗る必要もないだろう。まあ完全な嘘なんだが…だがしかし致し方ない。この際葉山にはジエットコースターを嫌いになつてもらおう。

「むー、今は先輩と来てるんですよー、葉山先輩が苦手でも先輩とならない理由にはなりません！第一葉山先輩がジエットコースターが苦手なんて聞いたことないですしー。」「い…いや…そ…それはだな、あれがあれで…そのー、なんだ…」

「あ、もしかして先輩ジエットコースター苦手なんですかー?」

「つ…! につ…苦手とかそんなんじやないぞ。ただよつとこれがそれだからな?」「はいはい、苦手なんですね…。それならそうと言つてくれればいいのにー。ほら! 着きましたよ先輩!」

鬼だ…鬼がいる…。

俺の作戦を完璧に打ち破つただけでなく葉山がジエットコースター苦手という嘘も見抜き、さらには俺のジエットコースター嫌いまで看破、そして苦手だと分かつた上で乗せようとするその意地の悪さ。

きっと前世は人間ではなく鬼だつたに違いない…。

「先輩なんか失礼なこと考えてませんかー?」

「…いや、考えてない…。」

なんで俺の考えることがわかるんだよ…。そんなに顔に出てる?俺結構ポーカーフェイスな方だと思つてたんだが…。

「先輩の考えることなんてわたしにはお見通しです!」

「超能力かよ…。」

テレパシーでも持つているのか?

じゃあこいつも斎木〇雄みたいに苦労してるんだろうな…ってそんなわけないです

ねそうですね。

「さていよいよわたしたちの番ですけど…、怖いのなら一つだけアドバイスをあげます！手を横に出すと怖さが軽減されるらしいですよ！」

いよいよ俺たちの番が来てしまった…。
どうにかして逃げようと一色の顔を見るがいかにも「逃がしませんよ？」って顔をしている。もうダメか…。

ジェットコースターに乗り込み、先ほどの一色のアドバイス通りに手を横に出す。
え、これ怖さ倍増しない？安心感が全くないんだけど。

「それではみなさん、空の旅にレッツゴー♪」

係員のお姉さんの声でジェットコースターが進み始める。

カタカタカタカタカタカタカタカタカタ

この登つてる時が一番嫌なんだよなあ…。

地獄行きの列車に乗つてる気分だ。

山の頂点に達し、降り始めた。

やはり怖いので手をバーに戻そうと少し浮かせたその時何か柔らかく、温かいものが

おれの右手を包んだ。

「せんぱいつ、手、繋いだら怖くないですよ?」

「つ
・
・
・
!?

た。 その時の彼女は奉仕部の教室で初めて会つてから、今までで一番可憐で、美しくみえ

その後は遊園地を満喫し、電車で一色と別れた。

家に帰つて一人横になつてゐると、ある思いが俺の頭をよぎつた。それは今日初めて気づいた自分の気持ち。

そう、俺は一色のことを：小町のように妹のようにではなく、1人の女性として愛おしく思っているのではないか、そんな思いが消えることなく頭の中をぐるぐると廻っていた。

第9話

今日は土曜日なので先輩の家に行つて晩御飯を一緒に食べる日！

いつもなら駅から先輩の部屋までのこの道をふわふわした気持ちで満たされながら歩くんだけど…、歩くんだけど…、

：遊園地に遊びに行つた後から先輩が少しそそつけない…気がするんだよね…。

前まではご飯作つた後とかに頭を撫でてくれて、突然ハツと気づいたように「すまん、無意識にお兄ちゃんスキルが！」なんて言つて笑い合つていたのに、最近は頭を撫でるどころか、あんまり目も合わない。今度こそ本当に嫌われちゃつた…？

でもそんな先輩に嫌われるようなことした覚えはないし…。

先輩は結構口では嫌だとかめんどくさいとか言うけど、実際本当にそう思つてることは少なくて、もう一回頼んだらちゃんと折ってくれるし。本当に嫌な場合はしつかり拒絶するし。

唯一ジエットコースターだけが苦手そうだつたけど、ジエットコースター終わつた後も結構笑つてたりしてたから、それが原因じゃないと思うし。

「うーん、ほんとになんでだろう…。」

歩いていると、無意識に顔がうつむいて下を向いてしまう。

人の歩く音がやけに耳につく。

そんな暗い気持ちに追い打ちをかけるように今日は雨が降っている。ザーザーと私の耳にまとわりつく雨の音を突き抜けて、すれ違ったカップルの会話が聞こえてくる。

「ちよ…そんなにくつくなよ…。」

「えー、いいじやーん？あんまり人いないし、暗いし…さらにこの傘ちつちやいからくつつかないと濡れちゃうよ。」

「まあ傘忘れたの俺だし…、我慢するけどさ…。」

「ひよつとして照れてるの？かわい〜。」

「そつ…そんなんじやねえよ！」

いいなあ相合傘…。いつかわたしも先輩と…………って、そんな場合じゃなかつた。ま

ずなんで先輩が最近素つ気ないのかを考えないと…。

…もしかして彼女ができたとか？

「つ、いやいやないない！だつて先輩だよ？目は腐つてるしあんなひねくれた先輩…。」

いや全然ありえるかも…、

高校と大学と同じ女子の視る男子の基準が違うし、先輩は確かに目は腐つてるけど逆

み

に言えばそれだけで他は整つたきれいな顔をしている。

しかも高校のあの奉仕部のおかげで、中には自分のことを理解してくれることも知つた先輩が、全ての人を拒絶するわけない。

きっと先輩のことを理解してくれる、いや理解してしまった人だつて何人かいるはず。

確かにこれまでに時々週末に用事があると行つて家にいなかつたことがある。その時は特に何も気にしてなかつたけど、今から思うと他の女の人と食事に行つてたりしたのかな…？

そんなの信じたくない。でも実際あり得てしまうのが現実なわけで…。

先輩は他人からの悪意にはとても敏感だけど、好意にはものすごく疎い。いや、疎いというよりは今までの経験トラウマによつて自分に好意を寄せる人間なんていないと自分の中で否定してしまつてゐる。わたしがあんなにアタックしてもずっと『妹』の枠から出ないほどだから、大学でもし誰かが先輩に想いを寄せていても先輩がそれに本当の意味で気づくことはない…と思う。

でももしその人がめちゃくちゃ積極的で、もう先輩に直接想いを伝えてしまつっていたら…？

いくら先輩でも直接伝えられたその想いが、好意が嘘じやないつてわかるはず。そうしたら先輩はきっと真剣にその人とのことを考へると思う。

そうなつたら……

自分の中にとめどなく溢れてくる不安。

多分先輩に「彼女いますか?」って聞いたら正直に教えてくれると思う。
でも、その答えがもし自分の望まない答えだつたら、わたしはわたしを保つていられる自信がない。

多分泣き出してしまうだろう。好きな人の前でみつともなく、それでもきっと諦められないだろう。先輩を困らせてしまうだろう。それならいつそ今の曖昧な関係でも……。

いや、そんな関係本物とは言えない。

先輩は本物が欲しいって言つてた。今もその気持ちに変わりはないと思う。わたしは先輩とそんな関係になりたい。

よし、今日会つたら先輩に聞こう。茶化さずに、真剣に。

それで、先輩に付き合つてゐる人がいたら諦めよう。：いや、嘘だ。諦められない、諦められるわけがない。あの人はわたしをえてくれた、大切な人だから。それでも、自分の気持ちに区切りはつけよう。これはわたしなりのけじめだ。

そう決意して、足早に先輩の部屋に向かう。

もう雨の音は聞こえなかつた。

先輩のアパートが見えてきた。

もう先輩帰つてるかな…?

澄んだ私の耳にある二人の男女の声が届いてくる。

「おい…、そんなにくつづくなよ…。」

「なに? 照れてんの? ウケるんですけど!」

「そ…そんなんじやねえよ…。」

「だつてうちが傘忘れたのに比企谷が濡れちゃわるいじやん? うちのためだと思って!

ね!」

「はあ…。」

先ほど固めた決意が崩れ落ちる音が聞こえた気がした。

再び雨の音がわたしの耳を塞ぎ、わたしは今までの自分の足跡を辿るようにして足早にその場を立ち去つた。

第10話

遊園地に行つたあの日、俺は自分の中に眠つていた一色に対する気持ちに気付いてしまつた。

家に帰つてから自分に限つてそんなことはない、と思いつらしだが、一色への気持ちを忘れようとすればするほど笑つた、困つた、怒つた、あざとい、いろんな一色が俺の中から顔を出す。

もう認めるしかないのだ。

俺は……比企谷八幡は一色いろはのことが好きなのだと。

小つ恥ずかしい気持ちもあるが、仕方がない。

ただその気持ちを認めてしまつたあと、一色との接し方がわからなくなり、これまでと違う対応をしてしまつている。

バレてない……よね？これで一色がもうすでに感づいてたりしたら恥ずかしすぎる。穴があつたら入りたいレベル。

「さて、帰るか……」

今日は一色がくる日だ。

大学の講座も終わったことだし、部活もないし、まっすぐ家に帰ろう。』

「……雨じゃねえか。」

今日一日考え方してたから全く外に気を配つてなかつたな、まさか雨が降つているとは……。まあバス停で立つてもどうしようもないのとりあえずバスに乗る。

「さて、どうするか。」

もうみなさんお気づきかもしけないが俺は傘を持つている。

いや持つてるんかいとつこんだそこの君、ツツコミの才能があるぞ、これからツツコミキャラとして頑張れ。

というわけで全く問題のない俺はすんなりとバスに乗り、そして一番アパートに近いバス停ですんなりと降りた。

そう、ここまで良かつた。しかし1人の某ウケるさんの登場で穏やかだつた俺の日常がぶち壊される。

「あれ、比企谷同じバスだつたんだ、ウケる！」

「いや受けないから。」

こいつは一種の縛りプレイでもしているのだろうか？

自分が三回話す間に一回は『ウケる』という言葉を使わなければならぬ、的な。人生ハードモードだなおい。

「ね比企谷傘2本持つてない?」

「いや傘を二刀流で装備してるやつはあんまりいないと思うぞ…。」

「だよねー。」

「お前傘忘れたのか?」

「そーなのー、朝持つて行こうとしたんだけど傘自身が拒否つてさー。」

「え、傘に自我あるとかウケるんですけど。」

「いかん口癖が伝染してきた…。」

「ちよつと黙るとか酷くなーい? 友達は笑つてくれるのにー。」

「そんなので笑えるほど豊かな人生送つてねえよ…。」

「てか友達ツツコめよ。笑つてる場合じやねえよ。」

「え、まさかツツコミ役いないの? そんな地獄がこの世に存在するなんて…。」

「ましてや折本なんてボケ製造機みたいなもんだろ、ボケしかない世界の完成じやねえか。」

「どうわけで比企谷傘に入れてよ!」

「やだよ。」

「どこから繋がつて『どうわけで』なんだよ…。そんなのダメに決まつてるだろ。女子と同じ傘に入つて帰るとか拷問と同義だろ。」

誰が自ら拷問受けに行くんだよ…。

「即答とか辛辣すぎてウケるんですけど…。ねーお願ひー。ほら、女子が濡れるとか大変じゃん?」

「いや水もしたたるいい女っていうだろ? 良かつたな折本、お前もいい女の仲間入りだ。」

というか相合傘とか周りの人に見られたら恥ずかしいだろ、余計な噂が増えるし。

ただでさえ今文研部に幽霊がいるとかなんとか言われて傷ついてるのに…。

「そう言わずにー、もしこのまま帰らせたら斎藤先輩に『比企谷に濡らされましたー』って言っちゃうからー! いやでもそしたら比企谷死んじやうじゃん、ウケる!」

いやウケないから…かくなる上は今から全力疾走して逃げるしかないな……つてあれ、折本力強いな、腕を掴んでる手が離れないぞ?

おやー? もしかして俺の腕と折本の手はS極とN極的な関係なのか?

そんなわけないですねごめんなさい。

……そんなこんなで本当に折本と同じ傘に入つてしましました。まさかこんなこと

になるなんて中学の頃の俺は微塵も思つてなかつただろうな…。その頃の俺に伝えてやりたい、いつか折本と相合傘できるようになるぞつてな。そうすればおれもここまでひねくれることはなかつただろうに…。

「いやー、中学の頃はこんな風に相合傘するとか全く思わなかつたー、ウケる！」
こいつ爆弾投げて来やがつた…。

普通その話仮にも振つた相手にするか？いやまあいいんだけどね…。
俺も折本のことはもう特になんとも思つてないしな。ほんとだよ？
ハチマンウソツカナイ。

「まあ、そうだな…つてかお前から入つてきたんだろ…。」

みなさん何故俺がこんなにもおとなしく折本と相合傘しているか分からぬだろう。
いや、色々あつたんだ斎藤先輩とは…。

大分端折つて説明すると斎藤先輩は最近俺が女の子に優しくできるように俺を強化中なのだ。

頼んでないのに…。

でもまあ嫌がらせではなく俺のことを考えてしてくれるのでやめろとも言えず…。
いや高校までの俺なら言つただろうが大学の俺は空氣読む系男子だから…。

それで女子に優しくしなかつたらめちやくちや怖い。

なんというか普通に怖いんじゃなくて、陽乃さんのような怖さだ。
目が笑っていない笑みほど怖いものはない。

…と言うわけでやむなく折本と同じ傘に入っていると言う状況である。

「おい…、そんなにくつくなよ…。」

何とは言わんが当たるだろ、というか由比ヶ浜ほどの存在感はないが折本もなかなか…。

「なに？ 照れてんの？ ウケるんですけど！」

「そ…そんなんじやねえよ…。」

「だつてうちが傘忘れたのに比企谷が濡れちゃわるいじゃん？ うちのためだと思つて！
ね！」

「はあ…。」

「それに比企谷のこともうなんとも思つてないし？ 問題なし！」

「いやそういうことじやなくてだな…、周りの目とか気にしろよ…。」

「よーし、着いたー！ 比企谷、ありがとね！ またなんか奢る！ ばいばーい。」

無視ですかそうですか。まあなんか奢つてもらえるみたいだしよしとするか…。

おっと、勘違いするなよ？ 俺は施しを受けるのは嫌いだが働きに対する報酬は喜んで受け取る主義だからな、今回もありがたく折本に奢つてもらうとしよう。

「そういや、そろそろ一色来る頃だな……今日はちゃんとしないとな。」

結局その日、一色は家に来なかつた。